

とき：2000.02.26. 13:30-16:30

第3回かながわ市民カレッジ：セルフヘルプ・グループと共に

場所：かながわ県民センター14階第1講習室（神奈川県横浜市）

テーマ：セルフヘルプグループとは何か

上智大学 岡 知史

1. [患者会](#)
2. [障害者の会](#)
3. [ひとり親の父親の会](#)
4. [死別の会](#)
5. [被害者の会](#)
6. [性的少数者の会](#)
7. [依存症者や嗜癖（アディクション）の会](#)
8. [その他の会](#)
9. [セルフヘルプグループの「なりたち」](#)
10. [セルフヘルプグループの「はたらき」](#)
11. [むすび](#)

セルフヘルプグループとはどういうものか。セルフヘルプグループという言葉もまったく聞いたことがない人にも、わかりやすくお話ししようというのが、今回の目的です。まず、セルフヘルプグループについてイメージしてもらうために、グループの例を並べて見ます。これからお話しするのは、患者会、障害者の会、ひとり親の父親の会などの例です。これを読んでいただければ、そこで当事者たちがわかちあう体験は違っていますが、そのセルフヘルプグループのなかで似たような体験をし、問題を解決していく様子が伝わると思います。このような例を並べたあとに、すべてのセルフヘルプグループに共通する「なりたちの基本的要素」と「はたらきの基本的要素」について説明します。

### [患者会](#)

セルフヘルプグループのわかりやすい例としては患者会があります。患者会といっても、ふつうの風邪の患者会というものは、おそらくないと思います。風邪は誰でもよくひくものですし、たいていの風邪はすぐ治るでしょう。あなたが風邪をひいたとき「咳がとまらないんだよ」と誰かにいえば、「今年の風邪は咳がよく出るからね」という言葉が返ってきます。それは言われた人も風邪のことはよく知っているし、自分も風邪をひいた経験があるからです。病院に行って「風邪なんですが」といえば、どこのお医者さんでも「ああ、じゃあ、これを飲んでみてください」と簡単に答えてくれるでしょう。

ところが風邪のように誰でもかかる病気ではなく、たいていの人はその病名すら聞いたことがないような病気があります。そういう人はお医者さんから「\*\*病ですね」と言われても、ピンとこないでしょう。友達に言えば「どんな病気？」と、なんだか根掘り葉掘り聞かれそうで誰にも言いたくない気持ちになるかもしれません。その病気でいる

いろいろ辛い思いをしても、周りの誰もが、そんな病気にかかったことがないのですから、「へえ、たいへんみたいだね」と、本当に他人事のようにしか言ってくれません。でも、そういう病気の体験がないのですから、周りの人がそういう反応をするのも仕方がないのかもしれない。

こういう人がその病気の患者会に行けばどうでしょう。そこに行けば、同じ病気をもった人が集まっています。病気の症状を少しでも話せば「ああ、それね、よくわかりますよ。私も去年はそれでたいへんでしたから」と答えてくれるかもしれません。みんな同じ病気の体験をしているのですから、自分の悩みを事細かに話さなくても、「そうそう、私も同じですよ」と、すぐにわかってもらえる。それで心が救われる思いをすることができます。

患者会は、その病気の情報も集めています。「\*\*病ですね」と診断されて、あわてて「家庭の医学」というような一般向けの医学書を読んでも、病名すら書かれていないことがあります。書いてあっても、ほんの数行。なかには「余命5年から10年」と書かれてあって仰天してしまうこともあります。ところが、患者会はその病気について詳しい説明書を自分たちで作っていることが多いのです。たいてい患者会には協力的な専門医師がいて、その協力のもとに、こうした説明書は作られているので内容は信頼できます。一般向けの医学書は情報が古い場合が多く、患者会に聞けば、最新の医学情報を教えてもらえますので、「余命何年」というような話はずっと昔のことだということがわかる場合もあります。

### 障害者の会

セルフヘルプグループのわかりやすい、もうひとつの例としては障害者の会があります。患者のなかには障害をもっている人もいるので、患者会と障害者の会は重なる部分が多く区別が難しいこともあります。ですから、ここでは患者会とかなり違うタイプの障害者の会の例をAさんという一人の女性の話を通してお話したいと思います。

Aさんは生まれたときから手足が不自由だったそうです。ですから、いろんなことをするのに、いつも誰かの介助が必要でした。そのため周囲の人からは「みんなから可愛がられる人になりなさい、そうしないと誰も助けてくれないよ」と教えられてきました。Aさんは、それを信じ「可愛がられる人」になろうと努めていました。そして、その結果、人から何を言われてもニコニコ笑っている人になりました。悔しいこと、腹がたつこと、悲しいこと、それらをみんな心の奥にしまいこんで、おとなしくて笑顔の消えない人になりました。

しかし、Aさんはそんな自分を「人形」のように感じはじめました。ボランティアの人と外出する機会があっても、自分の気持ちを伝えられない。自分の気持ちを伝えたとなん嫌われてしまうような不安を感じたからでした。気持ちを伝えられないと本当の人間関係はできません。身体が小さかったAさんは、彼女より若いボランティアからも「Aちゃん、おとなしくここで待っててね」などと子ども扱いされ、非常に不愉快な思いをしていたのですが、それでもニコニコ笑っている自分に気づいていました。そのうちに

ボランティアとのつきあいも重荷になり、人とのつきあいが怖くなりました。かといって一人でいても虚しく孤独感がつもりました。

そんなとき Aさんは自分の近所に障害者のセルフヘルプグループがあることを知ります。そこでは障害者の人たちばかりが輪になって自分の気持ちを語り、わかちあいます。悔しかったこと、腹がたったこと、怖かったこと、そういうマイナスの感情はずっと押し殺していたのですが、障害者の仲間ばかりの輪のなかにおいて、もう自分の気持ちを偽る必要がないのだと思いました。「人形」の仮面を脱ぎ捨てることができたのでした。ずっと抑え続けてきた感情を仲間の輪のなかに吐き出すこと。これを、ある障害者の会では「感情の解放」と呼んでいます。「気持ちのときはなち」と言ってもいいでしょう。同じ体験をしてきた仲間であるからこそ、恐れずに自分の感情を話すことができます。

いまの例は身体障害者のグループでしたが、もちろん精神障害者のセルフヘルプグループも全国にありますし、最近では知的障害者のセルフヘルプグループも開かれ始めています。

### ひとり親の父親の会

父親がむかしに比べて子育てに参加するようになったと言っても、母親のそばでそれを手伝うという形がまだまだ一般的ではないでしょうか。父親本人の意識がどうであれ、父親の職場じたいが、父親が中心になって子育てをするというを前提としていません。そのようななかで妻が亡くなったり、あるいは妻と離別したりした場合、父親はどのように子育てをしていくのでしょうか。

私は十数年もむかし、父子家庭の父親の会の例会に参加していました。そこには突然の妻の死にどうしてよいのかわからず、子どもにお金だけをもたせて、妻が生きていたところと同じように出勤、帰宅していた人がいました。子どもは毎食、菓子パンばかりを食べ、栄養失調の状態になってしまったそうです。会社から早く帰りたくても、同僚が遅くまで残業しているのに、すぐに帰るとは言いづらい。残業が当たり前のような会社だったのでした。上司に相談したいと思いましたが、そんなことをすると、かえって閑職にまわされてしまうかもしれないという不安がありました。

子どもは夜おそくまで寂しく一人で家にいます。仕事に疲れて、くたくたになって家に戻ると風呂に入って寝るだけです。洗濯も掃除もする時間がなく、台所は使った食器が山のように溜まっています。週末も家事の雑用がいっぱいで、イライラしてしまい、子どもも母親がいない寂しさから気持ちが不安定になり、父親と激しい口論が続くようになります。食事は、すべて外食になり、買い物も深夜のコンビニなどでするようになって出費が増えてきます。

何がなんだかかわからないうちに生活がすさんでくる。子どもは荒れてくるし、自分も酒の量が増えた感じだ。週末も疲れて寝るだけなので、子どもがつまらなそうにしている。そういうところに市の広報紙に「父子家庭の親子ピクニック」の記事が目にとまるわけです。少しでも子どもに楽しい思いをさせたいと、そこに参加することにしました。小

高い山に登ると、子どもたちは子どもどうしで、すっかり打ちとけて遊んでいる。ボランティアの学生もきているらしい。

久しぶりに大きな声で笑っている我が子の姿を見ていると、父親たちは父親たちで集まって、一杯やっているのが目に入ります。そばによってみると、「やあ、はじめまして、どうぞ、こちらにお座りください」と声をかけられた。その輪のなかに入って、ビールをつがれ、「よく来られましたね、たいへんだったでしょう」と言われると、ぐっと胸にくるものがあったそうです。

広報紙を注意して読んでこなかったために気づかなかったのですが、このピクニックは父子家庭の会が企画したということでした。仕事と子育ての両立の難しさは、一言いえば、みんなわかってもらえました。みんな全く同じような経験をしてきたからです。会社の同僚や上司には言えなかった悩みも、ここでは自由に話せました。他の父親たちは自分たちの悩みを話してくれました。細かな話も、いちいち説明しなくてもわかってもらえる感覚がありました。「ああ、悩んでいるのは自分だけではないんだなあ。みんな、がんばっているんだなあ」と思えば、勇気がわいてきたそうです。

その父子家庭の会では、来年のピクニックは母子家庭の会と合同で行なうとか。そこで新しいカップルが誕生することも期待されているようでした。また父親のための料理教室も開かれていました。講師は、やはり父子家庭の会の会員で、ホテルの料理長をしている人でした。子どもたちの弁当のおかずの作り方を学ぶと、次の例会では、その話題で盛り上がります。「私などは毎朝5時に起きて子どもの弁当を作っています」と発言する人がいると、周りは「えらいなあ、すごいことだよ」と感心する声が聞こえます。これを会社の同僚に言えばどうでしょう。「それはたいへんだね。再婚を考えたらどう？」と変な同情を受けてしまうかもしれません。亡き妻の思い出を大切にしながら、父と子が一生懸命生きていく。そんな生活を心から応援しあえるのは、やはり父子家庭の会しかないのではないかと思います。

この例を見てわかるように、セルフヘルプグループの例としては患者会や障害者の会が例として出されることが多いのですが、父子家庭の会や母子家庭の会もセルフヘルプグループになりうるのです。

### 死別の会

患者会、障害者の会、父子家庭の会と例をあげましたが、これらは問題の性格は違っていても、現在の生活をどうしていくかという具体的な課題があります。しかし、もっと心の中の問題を扱うグループもあります。それが死別の会です。

たとえば子どもを亡くした親の会があります。朝、子どもが学校に行くとき、「ほら、また遅刻しちゃうわよ、早く行きなさい！」と母親が声をかける。そして、そのあと子どもが道路を飛び出して車にはねられ、死んでしまう。「ああ、あのとき、早く行きなさいと言った私が悪かった。私が殺したようなものだ」と母親は自分を責め続けます。しかし、寝坊した子どもに「早く行きなさい！」と言うのは、どんな母親でも言っているこ

とではないでしょうか。それが交通事故につながり、子どもを殺したことになるでしょうか。理屈では、そんなことにはなりません、母親が自分を責める気持ちは理屈を越えているわけです。そして子どもを亡くした悲しみを受けきれなくて、その代わりに自分への怒りが炎のように燃えつづけます。いつのまにか他の子どもにも夫にも苛立ちをぶつけるようになり、家庭はかたむいてしまいます。

子どもを亡くした当初は友達は話を聴いてくれました。しかし、子どもを亡くした悲しみ、自分への怒りは何年も何年も続きます。いつも親切に話を聴いてくれていた親友も、何度も同じ話を聴かされてだんだん飽きてきたようです。「もう、いいかげんに乗り越えなさい」と、アドバイスされてしまい、誰にも話せなくなったように感じることでしよう。

ところが、子どもを亡くした親の会にいけば、そこにいるのはみんな同じように子どもを亡くした人たちばかりです。子どもを亡くした悲しみは何年も何年も続くことを、みんな知っています。亡くした子どものことを涙を流しながら語っても、みんな自分のことのように聴いてくれます。なぜなら、みんな同じ思いをしてきたからです。

#### 被害者の会

同じ心の問題でも被害者の会はもっと複雑な状況がからんできます。そこには加害者がいて、その加害者を法的に訴えなければならないこともあります。また現在も被害が続いている場合は、それに対処する術を考えなければいけません。そういったことを犯罪を受けたことによる心の傷を癒しながら行なうのは、たいへんな作業です。セルフヘルプグループは、そういう作業をする個人を応援してくれるでしょう。

最近、強姦など性的暴力の被害者たちのセルフヘルプグループも開かれています。性的暴力あるいは虐待が家庭内で、しかも父や兄から受けた場合は安心できる場所としての家庭が奪われているのですから、心の問題はいっそう深刻になります。しかし、幸いにもこうした家庭内の性的虐待を受けた人たちのためにも、セルフヘルプグループは動きはじめています。性（セックス）の問題は、なかなか多くの人の前では話題にしにくいものです。ですから性的虐待、性的暴力の被害者たちはこれまで沈黙を強いられてきたわけです。しかし、今後はこの分野でもセルフヘルプグループが増え、被害者たちの心を癒し、毅然として加害者と立ち向かうことを応援してくれることでしよう。

#### 性的少数者の会

むかしからあったものの最近になって、どんどん広がりを見せてきたセルフヘルプグループに性的少数者の会があります。性的少数者としては同性愛の人がいます。私は同性愛者のグループのメンバーのお話をうかがったことがあります、その悩みかたと、グループにはいったときに感じる安心感のようなものが、患者会や障害者の会ととても似ているという印象を受けました。そのときにお聞きしたのは、次のような話でした。



その人は思春期になったとき、同じ年代の男の子たちが集まってするような猥談に、どうしても関心ももてず、そんな話をしてどこが面白いのか不思議だったそうです。そのうち素敵だと思う男性の先輩のことが忘れられなくなり、プレゼントをしたりしていましたが、それが噂になり自分が同性愛者ではないかと疑いを持つようになった。

自分が同性愛者であるということは、認めるのが非常に辛かったそうです。自分は結婚できないかもしれない。家庭がもてないかもしれない。第一、男性が好きになっても、相手も同性愛者でないかぎり、永遠に失恋しつづけるしかないわけです。それは辛すぎる。だから自分は異性愛者であるはずだし、そうであってほしい。そう思った彼は女性に自分が興味があることを確かめるために、エロチックな写真を集めて興奮しようと努力したり、手あたりしだいに女性に声をかけ、女性と恋に陥る機会を求めたりしたそうです。しかし、そうしたことを何度やっても自分を偽っているという気持ちが消えずに苦しんだそうです。そういう彼が同性愛者のセルフヘルプグループと出会い、自分が同性を求める気持ちをそのまま認めるきっかけになるわけですね。自分が同性愛者でありながら、同性愛に対してさまざまな偏見をもっていたことを知ります。グループを通して尊敬できる多くの同性愛者たちに出会い、同性愛そのものへの考え方も肯定的なものに変わっていくわけです。

同性愛というのは、おそらく一種の文化の問題でしょう。よく知られているように江戸時代には井原西鶴が「男色大鑑」を書いていたりするわけです。江戸時代の文化では「ふつう」だったものが、いまの日本の文化ではそうではない扱いをされてしまっている。だから異性間の性的関係しか認めていないいまの文化を、同性間の性的関係も同じく認めていく多様な価値観をもつ文化に変えていくことが、同性愛者たちのセルフヘルプグループが目指している目標のひとつだと思います。

性的少数者には他にトランス・セクシュアルと呼ばれている人たちもいます。自分が女性の身体をもちながら、心は男性である、あるいは逆に男性の身体をもちながら、心は女性であるという人たちで、その不一致に苦しみ性転換手術を望む人たちのことを言うようです。性同一性障害という言葉が一時期マスコミでよく流れましたが、その障害の程度が強い場合が、トランスセクシュアルに相当すると考えてよいようです。このトランス・セクシュアル（略してTSと言われることが多いのですが）の人々も、いまや全国各地でセルフヘルプグループを作っています。

インターセクシャル（IS）と呼ばれる人たちは、身体の面で男性でも女性でもない、あるいはどちらでもあるという特徴をもっています。人間の性が男か女かの2つにひとつではなく、いくつもの性があるということを主張している点で、インターセクシャルのセルフヘルプグループは私たちの性の文化を根本的に問い直すものをもっています。

### 依存症や嗜癖（アディクション）の会

最後になってしまいましたが、アルコール依存症や、薬物依存症、ギャンブル依存症、性依存症、摂食障害などの依存症や嗜癖の分野は、セルフヘルプグループの伝統が最も古く、また最も洗練されたやりかたでセルフヘルプグループが実践されているところで

す。とくにアルコール依存症者のセルフヘルプグループであるアルコールクス・アノニマス (AA) は、セルフヘルプグループの「老舗中の老舗」のようなところで、日本でも非常に多くの人々が参加しています。そのグループの運営の仕方や、グループを通じての依存症からの回復についての考え方は、「12の伝統」「12のステップ」とよばれる形にまとめられ、他のセルフヘルプグループに多大な影響を与えました。外部の研究者によってもっとも研究されてきたのが、このAAです。したがって、セルフヘルプグループをめぐる理論の大半がAAをモデルにして作られてきたといっても言い過ぎではないと思います。

### その他の会

上にいくつか例をあげましたが、まだまだいろんなセルフヘルプグループがあります。神経質症の人たちのセルフヘルプグループは、古くからあり、しかも日本の文化に根ざしたセルフヘルプグループを展開しているという点で注目すべきものだと思いますし、吃音(きつおん)者のセルフヘルプグループは、国際的にも日本のグループがリードしてきた実績があります。

新しいところでは「普通の人たちとは異なる容貌をもつ人たち」のグループがあります。メンバーのなかには顔に赤いアザがある人がいました。この人たちがもっていた深い悩みは、まさにセルフヘルプグループでしかわかちあえないものだったと思います。また障害をもつ母親の会というものもあります。障害児の母親の会は従来からありますが、障害をもつ母親の会はまだまだ多くありません。しかし、それを必要とする人はきっと多くいるのですから、今後は増えていくと思います。

帰国子女の親の会というものもあります。外国育ちの子どもが日本の学校になじめない。それで子どもも親も悩む。それで作られた会です。転勤族の会も全国にあるようです。双子の親の会や、三つ子以上の多胎妊娠・出産を経験した人の会もあります。最近、話題になっている「ひきこもり」の人たちのセルフヘルプグループもあります。引きこもって部屋から出られない人は、インターネット上でグループをつくっていたりします。一人暮らし老人たちが集まってセルフヘルプグループをつくることもあります。

### セルフヘルプグループの「なりたち」

さて、こうしてみると、どのような体験でも誰かとわかちあいたいと思えば、セルフヘルプグループをつくることができるということが、おわかりになったと思います。セルフヘルプグループが患者や障害者の会であると思いきこんでいた人も多かったと思いますが、文化の問題や家庭の形のありかたでも、セルフヘルプグループがつけられるのだということです。

ですから、セルフヘルプグループが成り立つための第1条件は「体験の共通性」です。共通の体験があれば、そこからセルフヘルプグループが出発できます。わかちあいたいと思う体験であれば何でもかまいません。たとえばTSの悩みなどは数十年前の日本では、なかなか人にはいえないものだったことでしょう。そういう悩みすらあることを大

多数の人たちは知らなかったでしょう。このように現在の私たちが思いもよらない悩みで数十年後、セルフヘルプグループが誕生する可能性は充分にあります。ここにセルフヘルプグループの果てしない可能性があるわけです。

そして第2の条件は「参加の自発性」です。似たような体験をした人が無理やりに集められることがあります。無理やりに集められても、そこで仲間意識が育つものではありません。自由に体験をわかちあうことも難しくなります。セルフヘルプグループは外部者から促されてつくるものではありません。当事者が自発的に参加しないかぎり、セルフヘルプグループにはなりません。

共通の体験をわかちあいたいという人々が、自発的に集まってきた。とすれば、最後の条件は「活動の継続性」です。病院の待合室で、たまたま同じ病気の人と出会った。やっとわかりあえる人に出会えたと思って長く話し続けた。これだけではセルフヘルプグループではありません。この出会いが継続されていく必要があります。つまり日時や場所を決めて、新しいメンバーを募集したりして活動が続いていくようにします。

この3つの要素「体験の共通性」「参加の自発性」「活動の継続性」がそろえば、セルフヘルプグループは成立すると考えていいでしょう。

### セルフヘルプグループの「はたらき」

この3つの要素がそろったとき、セルフヘルプグループはどう動くのか。簡単にいえばそこで「わかちあい」が行なわれます。上にあげた例を注意深く読んでいただければわかるように、グループのなかでは、わかちあいが行なわれます。

わかちあうものは、まず「気持ち」です。これまで誰にもわかってもらえなかった、辛かった、孤独だった、そういう気持ちをわかちあいます。辛い気持ちはわかちあえば辛さは半分になり、幸せな気持ちはわかちあえば二倍になります。わかちあうのは「気持ち」だけではありません。病気や制度についての「情報」もわかちあう対象になります。さらに、さまざまな考え方や価値観もわかちあわれます。上にあげた例でいえば、朝早くから起きて子どもたちの弁当をつくる父親は「すばらしい」という価値観です。

セルフヘルプグループでわかちあう価値観は、すべてプラスの価値観だといっていいでしょう。当事者を否定せず、その尊厳を認め、勇気づけ、力づける価値観です。「障害もひとつの個性と見よう」という考え方も、そのひとつです。つまり、このような価値観は人を心の重荷から解放するものです。こうして「わかちあい」から「ときはなち」が実現されます。いままで抑えていた感情を表現することによって得られる「ときはなち」もあります。役に立つ情報を得ることによって、さまざまな生活の困難からの解放されることもあるでしょう。

また「わかちあい」によって得られた情報によって、一人一人の自立、つまり「ひとりだち」が実現されます。気持ちの「わかちあい」によって気持ちが整理され、安定し、



自分を冷静に見ることができるようになるという意味で、気持ちのうえでの「ひとりだち」もできるようになるかもしれません。

このように「わかちあい」から出発して、「ひとりだち」と「ときはなち」を実現していくというのが、セルフヘルプグループの基本的な「はたらき」であると私は考えています。この「ひとりだち」と「ときはなち」は別々のものではなく、深い関係にあるのですが、それについては私の本を読んでいただければと思います（岡知史(1999)『セルフヘルプグループ：わかちあい・ひとりだち・ときはなち』星和書店）。

### [むすび](#)

まったく違った分野で活動しているセルフヘルプグループの例をならべ、わかちあわれる体験はずいぶん違って、グループのなかで行なわれることは共通の要素がいっぱいあるということを示してみたいつもりです。セルフヘルプグループは、わかちあう体験はそれぞれかなり特別なものです。別々の分野のセルフヘルプグループが集まっても、お互いの体験を理解しにくいということは十分に考えられます。

私の夢はさまざまなセルフヘルプグループが、わかちあう体験は違っていても、グループのなかで体験することは基本的には同じだと気づいていただくことです。本当に多様な体験をもつ当事者たちが自由に交流し、みんなが地域福祉の向上と、差別のない地域社会の実現をめざして協力しあえたら、どんなにか素晴らしいことでしょう。そんな日が一日でも早くくるように私は願っています。

(その後、添付のプリントをもとに話し合う話題を提供した。)

## セルフヘルプグループとは何か？

岡 知史 / 上智大学文学部社会福祉学科

1. セルフヘルプグループは新しい市民活動です。
  - むかしから障害者の会とか、あるじゃないですか？
2. セルフヘルプグループとは「本人の会」のことです。
  - 「家族の会」は「本人の会」とは違いますか？
3. 「本人の会」でいちばん大切なのは「わかちあい」です。
  - 「たすけあい」と「わかちあい」は違いますか？
4. 「わかちあい」の目的は二つ。ひとつは「ひとりだち」です。
  - 誰の助けもいないことが「ひとりだち」ですか？
5. 「わかちあい」のもうひとつの目的は「ときはなち」です。
  - 「わかちあい」だけで解放（「ときはなち」）されますか？
6. 「本人の会」の第一の「なりたち」は「共通の体験」から。
  - 共通の「問題」とか「病気」ではないのですか？
7. 「本人の会」の第二の「なりたち」は「自発的な参加」から。
  - 「つきあい」で参加していますが、それでもいいですか？
8. 「本人の会」の第三の「なりたち」は「継続的な活動」から。
  - だらだらと続けているだけで意味があるのですか？
9. よくあるセルフヘルプグループの課題
  - わかちあいができない / 新しい人がこない / 負担が一部の人に集中
10. 質疑応答
  - <http://socwork.net/shg/> にセルフヘルプグループの研究のためのメーリングリストがあります。どなたでも参加できます。

## 第3回 かながわ市民カレッジ

～セルフヘルプ・グループと共に～

はじめに

～セルフヘルプ・グループ（SHG）とは何か？～

講師 岡 知史 さん  
（上智大学福祉学科助教授）

## 第1日目

2000年2月26日（土）13:30～16:30  
かながわ県民センター14階第1講習室

主催 社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会  
かながわボランティアセンター